

令和 4 年 6 月 27 日現在

機関番号：32614

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2021

課題番号：16K03483

研究課題名(和文)後期マッキーバーの「社会科学」論

研究課題名(英文)The Idea of Social Science of R. M. Maclver

研究代表者

苅田 真司(Karita, Shinji)

國學院大學・法学部・教授

研究者番号：30251458

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：後期マッキーバーの思想について、社会科学史の手法を用いて分析を行った。その結果、(1)後期マッキーバーの思想において、相互性・制度主義・動的評価の概念が中心的な役割を占めており、文化的秩序と技術的秩序のずれを認識する動的評価が社会的秩序を作り出していること、(2)後期マッキーバーの思想において、自然科学的因果性と社会科学的因果性が峻別されていることが明らかになった。また、(3)社会科学観と社会科学教育の構想に関して、「学者」型と「技術者」型の対立があることを、コロンビア大学の同僚であるロバート・リンドとの論争の中から明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

後期マッキーバーの思想を、同時代の社会科学方法論の観点から分析することにより、アメリカ社会科学史における後期マッキーバーの思想の位置とその特質を明らかにした。また、1930年代における多様な社会科学構想の一面を描き出すとともに、社会科学の果たすべき役割と高等教育内での制度的な構成についての対立を、具体的な形で解明し、アメリカ社会科学史の発展に貢献した。

研究成果の概要(英文)：I analysed the later thought of R. M. Maclver in respect of the History of social sciences. I found (a) the main concepts of the later Maclver thought are "interactionality", "institutionalism" and "dynamic evaluation" and the gap between the "cultural order" and the "technological order" cause the "social order" by means of dynamic evaluation, (b) There is a sharp distinction between the causation in natural science and that in social science, (c) Maclver conflicted with his colleague, Robert Lynd on the idea of the social science and the task of the social scientific education.

研究分野：政治学

キーワード：アメリカ社会科学 マッキーバー 社会科学史

## 1. 研究開始当初の背景

(1)研究代表者は、2004年以來アメリカ政治学および社会科学の歴史的展開過程を、その「科学」観と組織形態という二つの側面と、その相互作用の面から研究し着実な研究成果をあげてきた。  
(2)本研究は、本研究に先だって行われた、パウル・ラザスフェルドを中心とする1950年代のアメリカ社会科学に関する研究を踏まえて、これまで研究代表者が十分な分析を行ってこなかった1930年代後半から1940年代におけるアメリカ社会科学の展開過程について検討するものである。  
(3)本研究では、この困難な時期において、方法論的な議論を行ったロバート・マッキーヴァーを中心に据え、彼を取り巻くコロンビア大学の社会学および政治学グループの動向を検討することで、1930年代後半から1940年代におけるアメリカ社会科学の方法論的構想および制度的構想の様相を明らかにしようとするものである。

## 2. 研究の目的

(1)本研究は、政治的多元主義論者として知られるロバート・マッキーヴァーの後期の思想に着目し、アメリカの社会科学方法論に対するその意義を明らかにしようとする研究である。コロンビア大学時代(1927~1950)のマッキーヴァーは、初期の多元的社会的分析から社会科学の方法論へとその研究の方向を次第に転換していく。1942年に出版された『社会的因果論 *Social Causation*』に代表される議論は、19世紀後半以来のアメリカ社会科学の展開を踏まえたものであり、その一つの集大成とみなすことができる。本研究は、こうした後期マッキーヴァーの「社会科学」論の分析を通じて、1940年代におけるアメリカにおける「社会科学」観と「社会科学」構想を解明することを目的とする。  
(2)また、マッキーヴァーの薫陶を受けたコロンビア大学の社会学および政治学の研究者達は、1950年代以降のアメリカ社会科学の中核を構成していく。その意味で、コロンビア時代のマッキーヴァーは、第二次世界大戦前のアメリカ社会科学と、第二次世界大戦後のアメリカ社会科学をつなぐ結節点の一人でもある。本研究でも、研究代表者のこれまでの研究と同様の手法を用いて、一方でマッキーヴァーの「社会科学」観の影響を思想的に分析するとともに、そうした「社会科学」観を固定化するための制度的諸形態とその帰結についても分析を行うことを、もう一つの目的とする。

## 3. 研究の方法

(1)後期マッキーヴァーの社会理論の特質を明らかにするとともに、1930年代前半までのアメリカ社会科学との連続と断絶を明らかにすることによって、アメリカ社会科学史の中に位置づける。また、そもそもあまり注目されることの少ない後期マッキーヴァーの思想を詳細な分析は、アメリカ社会科学史およびアメリカ政治学史における失われた輪の一つを復元することにもつながる。  
(2)マッキーヴァーの科学観の影響について分析を行う。特に、マッキーヴァーの科学観が、コロンビア大学における社会科学観に与えた影響と、それに対する反発が分析される。また、そうした「科学」観に基づく具体的な研究組織形態の構想を明らかにする。  
(3)上記分析の総合として、後期マッキーヴァーとコロンビア社会科学のアメリカ社会科学史における位置づけを、とりわけその制度的な側面に注目しながら、歴史的な文脈の中で解明する。

## 4. 研究成果

(1)後期マッキーヴァーの社会理論に関して、1942年に出版される『社会的因果論 *Social Causation*』に結実する1930年代におけるマッキーヴァーの社会科学基礎理論の分析を行った。その結果、後期マッキーヴァー理論の特徴につき、以下の点を明らかにすることができた。

相互性(interactionality)...後期マッキーヴァーは、象徴的相互行為論的な観点に立ち、言語や身振りその他の文化的な要素を媒介とする象徴的なコミュニケーションによって、ある人の精神が、他の人の精神に影響を与える過程こそが、社会分析にとって重要な意味を持つとした。その中心にあるのは、状況を定義づける過程としての、「動的評価」(dynamic assessment)である。

制度主義(insitutionalism)...マッキーヴァーは、制度を相対的に安定した、共有された価値と、その価値から帰結する行動の秩序として理解し、社会の主観的な側面と制度的な側面の相互作用を、意図された限りにおける関係の結果として取り上げた。その結果、社会

は常に実体ではなく、過程として把握されることになる。

秩序概念の分類... マッキーヴァーは、1940年代にはその秩序概念を「文化的秩序(cultural order)」、「技術的秩序(technological order)」、「社会秩序(social order)」の3つに分類する。「文化的秩序」は、「有効な価値と目標のパターン、相互調整、トレンドからなり、モース、習俗、伝統、信念、芸術、哲学、遊びその他の一般的な社会集団の生の様式に現れる」ものである。「技術的秩序」とは、「人間の価値や目標の達成に利用される多様な機器、道具、技術的スキルから構成されるものであり、工芸、設計とデザインの技法、生産と配分という経済的システム、攻撃と防御という軍事的なシステム、統制と操作という政治的な主体、その他文明の永遠に変わり続ける装置の中で蓄積されるものに現れるもの」である。そして、「社会的秩序」とは、「社会的存在の関係の様式のパターン、相互調整、トレンドからなるものであり、その集団形成や、結成と解散の多種多様な様式と条件に現れるもの」である。マッキーヴァーは、「文化的秩序」と「技術的秩序」が、文明の進歩と共に分化していくことを指摘すると共に、複雑化した社会における主要な問題の1つは、この二つの秩序を相互調整することであるとした上で、この二つの秩序の状況を個人が主体的に評価する「動的評価」によって形成される「社会的秩序」を、社会学における分析の主要な対象とすべきであるとした。

以上の分析によって、これまで十分に検討されることのなかった後期マッキーヴァーの社会学理論を構成する諸要因を抽出し、その特徴を明らかにした。この研究成果については、論文「リンドとマッキーヴァー」(2021年)でその一部が公表済みであるが、全体像については、「マッキーヴァーの社会科学論」で公表する予定である。

(2) 後期マッキーヴァーの著書である『社会的因果論 *Social Causation*』について、同書に引用されている同時代の自然科学、社会科学における因果性に関する文献等を参照しつつ分析を行い、社会科学における因果性論の同時代的文脈の中に位置づけた。また、その過程で、1930年代アメリカ社会学における「方法論論争」に関するマッキーヴァーの関わりについても解明を行った。

1930年代のアメリカ社会学においては、実証主義派と解釈的社会学派との論争が行なわれていたが、この論争にマッキーヴァーは大きく関わっている。実証主義派の代表格である、ルンドバーグが、行動論心理学と操作主義の直接の影響の元に、外的に測定可能な人間の行動だけが社会学的な研究の対象となるべきであり、人間の意図や動機の理解は一種の神秘化に他ならないと主張したのに対して、マッキーヴァーは、上述したような個人と制度の相互的な関係を重視する立場から、こうした過度に実証主義的な方向に反対する立場を取っていることを、本研究は明らかにした。

社会科学には自然主義的な方法を採用すべきではないというマッキーヴァーの主張は、初期の『コミュニティ』や『社会学要論』の時代から一貫している。例えば、『コミュニティ』の序文においては、物理学と生物学の方法から解放されることが社会科学の進歩の第一歩であることが主張され、「社会科学は固有の主題を持つ同時に固有の方法を持つ」のであって、「社会関係は量的観点によって決定的に捉えられるものではなく、また量的法則の表現として理解されるわけでもない」と論じられているが、こうした観点は、少なくとも1940年代までは一貫していることが、本研究によって明らかとなった。すなわち、『社会的因果論 *Social Causation*』での、「物理的因果関係の鎖には、その発見時を除いて精神は必要ないのに対して、社会的因果の鎖が存在するためには、精神が必要である。この違いにどれほどの重要性を認めるかは、哲学的な立場によるだろうが、その哲学がいかなるものであるとしても、そこには違いがあるのである」という記述に典型的に示されるように、社会科学と自然科学を峻別する姿勢は維持されているのである。

その上で、『社会的因果論 *Social Causation*』においては、自然科学的な因果性概念と社会科学的な因果性概念の違いが、上述の「動的評価」概念を中心として詳述される。いいかえれば、後期マッキーヴァーの理論的諸要素は、社会科学的な因果性と自然科学的な因果性との種差性を説明するためのものであり、因果性こそが、後期マッキーヴァーの理論的な中心概念であることが、本研究によって明らかになった。

この研究成果については、論文「リンドとマッキーヴァー」(2021年)でその一部が公表済みであるが、全体像については、「マッキーヴァーの社会科学論」で公表する予定である。

(3) バーナード・カレッジおよびコロンビア大学時代の人間関係を、マッキーヴァーの回顧録、公刊・未刊の資料の分析を通して解明した。特に、1930年代に同僚となったロバート・リンドとの関係について、リンドの『何のための知識か Knowledge for What?』及び1939年8月のSurvey Graphics誌上に掲載された公開論争を出発点として分析を行い、統計学的手法の普及に伴う社会科学観の対立を解明すると同時に、初期アメリカ社会科学理念の転換を跡づけた。

リンドは、同書の中で、大学で研究を行う研究者を「学者」(Scholar)と「技術者」(technician)の二つに類型化した上で、研究の有意性の基準と関連付ける。すなわち、研究の有意性の基準を

個別科学の探究内部の問題設定に求めるものが「学者」であり、個別科学ではなく、現実の問題に対する解決策の探究に求めるものが「技術者」なのである。そして、個別科学における統計的な研究手法の浸透は、一方で大学における専門化の要請という教育上の必要と数量的な分析そのものが持つ本来的な限界から、個別科学の探究内部の問題設定を優先する傾向を生み出し、「学者」が生み出されやすいことを指摘した上で、社会科学が現実の問題に対する解決を提示する能力を失いつつあることを批判している。

これに対して、マッキーヴァーは、リンドが「科学的秩序(scientific order)」と「倫理的秩序(ethical order)」を混同しているとし、それによって、数量的研究が、既存の制度的な構造を受容し、それを正当化することにつながるという、リンドの誤った批判が生まれていることを指摘する。マッキーヴァーは、「ラディカルな批判が、科学的一般化と同じ知的機能であると示唆している点で、彼は完全に間違っている」として、両者の峻別を主張する。第2に、マッキーヴァーは、社会科学の真の任務は、現実の問題を解決することであるとしても、それ以前に科学が存在していなければならないとして、リンドの社会科学観そのものを批判する。さらにマッキーヴァーは、社会科学を「現在の重要な決定」にどのように役立つのか、という観点からのみ評価するリンドの評価基準にたいする批判を加えている。このほぼ全否定ともいえる批判に対して、リンドもまた応答している。

この両者の対立を、論争に直接関わる文献だけでなく、回顧録などの個人的な記録や未公開のメモや書簡等を合せて分析することで、争点となっているのは、社会科学的な知識の方法論に関わる問題ではなく、その知識を特定の問題解決に向けるべきかどうかという、社会学者の任務の問題であることを明らかにした。それは、社会科学を高等教育の中でどのようなものとして位置づけていくかという制度化構想の対立であると同時に、実践的な問題の解決を志向して生まれたアメリカ社会科学が、制度化と専門化の中で、次第に実践性を失っていくことに対する評価の対立であることも明らかにし、この両者の論争をアメリカ社会科学史の中に位置づけた。

この研究成果は、論文「リンドとマッキーヴァー」(2021年)として公表済みである。

以上の研究を通して、後期マッキーヴァーの社会科学論の分析、および、コロンビア大学における社会科学観の対立と制度化構想の解明という、本研究の目的は概ね達成することができた。

#### 引用文献

苑田 真司、「リンドとマッキーヴァー もう一つの社会科学方法論争」、『國學院法学』第58巻第4号、1～30頁、2021年3月

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 苅田 真司	4. 巻 58
2. 論文標題 マッキーバーとリンド	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 國學院法学	6. 最初と最後の頁 (1) ~ (30)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 アイリス・マリオン・ヤング、飯田 文雄、苅田 真司、田村 哲樹、河村 真実、山田 祥子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 410
3. 書名 正義と差異の政治	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------